RNC 西日本放送ラジオ番組

CHIT CHAT RADIO 子育て CHAT ROOM

2021年7月20日15時16分～15時39分

子ども島のゴジラ君の雄叫び(子どもの目を見て話しかけて!)

―鈴木先生、今日もよろしくお願いいたします。

よろしくお願いいたします。

―そして今日は、鈴木先生ともう一人ゲストにいらっしゃっているじゃないですか!

(ゴジラ)私は、子ども島から来たゴジラくんです。

―ちょっと待ってください。(笑)

―インパクトがありますね。(笑)

―いろいろ聞きたくなるんですけれども、お聞きして大丈夫なんですか?鈴木先生。

(すずき)私から説明しますね。(笑)子ども島のゴジラくんの仮の姿はですね、香川大学医学部小児科の教授で日下隆先生です。日下先生は小児科の中でも赤ちゃんを専門とする先生で、NICU(赤ちゃんの集中治療室)で働くだけでなく、小さく生まれた赤ちゃんの発育を外来でずっと見守っていらっしゃいます。また、医学部での教育や研究にも熱心に取り組まれています。先生は毎週書道を習っていまして、留学生の集まりでも名前を漢字で書いてプレゼントして、喜ばれてました。今はできないんですが、先生はよく自宅に学生を招いてバーベキューをしたり、とてもフレンドリーな教授らしくない先生、いえ、ゴジラくんです。(笑)

―ちゃんとした方じゃないですか。(笑)

(すずき)はい、ちゃんとしてる方です。(笑)

―子ども島のゴジラくん、こちらが本当の姿で仮の姿が香川大学の教授ということですね。(笑)

―今日はちょっと波乱が予想されますね。(笑)すごく柔らかな雰囲気をお持ちの方でいらっしゃいますから。そのために子ども島のゴジラくんというネーミングも考えられて。

(ゴジラ)なぜ子ども島かっていうのを言いたかったんですけど、ぜひそこをよろしいですか?

—それはぜひ、お聞かせください!

(ゴジラ)子どもの時の思い出で一番心に残っているのは、幼い頃から通っていたキリスト教の教会で行ったキャンプですね。実は僕、香川県高松市の出身で、夏休みのキャンプでは男木島に行くんですね。そこのキャンプ場は北側の灯台の所にあるんですが、あそこには水道もトイレもなかったんです。港から水をタンクに入れて、みんなでキャンプの道具を背負って歩いて行く。

—長い道のりを?

(ゴジラ)2、3キロの山道を行くんですが、その時に自分の荷物+皆で使う荷物を一つ持って行くんですね。それがみんなの役に立ってると感じて、嬉しいんですね。そして、そのキャンプ地で食べるカレーがすごく美味しい。米をまず海水で洗って炊くんですね、だから、ちょっとしょっぱいんですけど美味しいんです。

—洗うときだけは海水で?

(ゴジラ)そうです。それですぐ行ったらテント張るんですけど、今のようなかっこいいテントじゃないのですぐ倒れちゃうのね。それでもなんか楽しいし、沢山落とし穴を掘って自分も落ちてるし、とっても楽しい。焚き火も自分たちで流木を集めてきてキャンプファイヤーをするんですけど、紅白歌合戦とか勝手にしちゃったり、肝試しの脅かす役を作って、あなた、あっちで(お化けになって)待ち伏せしててらっしゃいって言って、そのまま放っておくとかね。(笑)

(すずき)先生の原点なんですね、子ども時代の。

(ゴジラ)そうなんです。そこでの思い出が子どもの原点なんで、「子ども島」です。

—その次のゴジラくんは?

(ゴジラ)今、僕、仮の姿で小児科医しているんですけど、子育てのことに関して子ども目線でご両親に訴えたいことがあるんです。もう激しく訴えてやろうと思って、今日は登場しました。

—東京湾ではなくて高松港あたりにジャジャジャン、ジャジャジャンと上陸してきてるんですね。

—今日はゴジラくんこと、日下先生にお越しいただいていますが、このコーナーでは子育てに関する様々なことを鈴木先生に伺っているんですね。ゴジラくんは子育てや今の子どもたちについて何か思うことございますか？

(ゴジラ)一言で言えば、お父さんお母さんに子どもたちを見て欲しい。ご両親はスマホ等からの情報にはすごく敏感ですが、自分たちの子どもたちをご覧になってない方がかなりいらっしゃるんじゃないかと思います。

僕は赤ちゃんの一ヵ月健診をするんですけど、その時に「お母さんは赤ちゃんの目が合いますか？」って質問するんです。すると3割位のお母さんが「赤ちゃんの目が見えるんですか？」って言うんです。人間は、生まれた時から人の顔、特に目を見るようにできているんですね。特にお母さんがおっぱいを飲ませる位の距離がよく見えるんです。遠くは見えませんけども。でもそれがね、できてないのね。だから僕お母さんに「しっかりお母さんが赤ちゃんの目を見て、話しかけてください」って言うんですよ。

親は脳の大脳皮質、計算したり、文章読んだりする脳は一生懸命に教育しますけれど、目を見て話しかけることこそしてほしい。そこをしっかりしないと、最も大事な情緒の部分が育たないんですね。それができるのが赤ちゃんの時ですから、それをしっかりしないと子どもが本当に不安定になると僕は思いますね。ですから、とにかく生まれた時から子どもの目を見て、「あんたのこと、好き」って一日百回言ってほしいですよ！

—確かにそこはすごく重要なんだなという気がしますね。

(ゴジラ)前にファミリーレストランに行った時に、お母さんと小学校前位のお子さんが向かい合ってテーブルで食事してたんですね。そのお子さんはお母さんの顔をチラチラ見ながら食べるんですが、お母さんがスマホばっかり見て子どもに話しかけてなかったんです。もうすごく悲しくて。声かけたくなったけどやめました。おかしいおじちゃん、ゴジラになっちゃうんで。

でもゴジラとして言いたいのは、スマホは便利なんだけど、人を惹きつけるように作られているので、その危険性を考えて、子どもに見させるのは極力控えてほしいなって言う事ですね。そして、お父さんお母さんにそっちばっかり見るんじゃなくて、自分の子どもを見てほしい。

子育てで重要なことは、子どもの状況はある程度幅があることを理解してほしい。○か×かのどうちらか、じゃないんです。ほとんどが中間の△なんですよ。△の幅をやっぱりお父さんお母さんが考えて、ご理解していただきたいなと思います。それがもう今回のゴジラの主張です。

—確かに私も子育て中ですが、ついついスマホに逃げちゃうところがあるので耳が痛いです。やっぱり子どもと向かい合っている時は、極力スマホをカバンにしまっておくよう意識してや

っていかないといけないなって思いますね。

—でもね、主張されている事は生まれてすぐから、子どもの目を見て向き合って愛情をちゃんと伝えるということですね。鈴木さんも日下さんと日々香川大学の中で接することもあるかと思いますけど、こういった考えってやっぱり重要だと鈴木さんの立場でも感じられますか？

(すずき)そうですね、目を見ることで子どもの心に触れることができるということだと思いますね。子どもが大きくなったら、目を見て話を聞いたときに、「前向きな相槌を打つ」ことがすごく大事だなと思っているんですよね。話を聞いて「あー、なるほどね！そうなんだ！面白そうだね、もっと聞かせて！」っていうような前向きな相槌です。「だから何？」とか「そんなことしてどうすんのよ」とかネガティブな相槌を打つことありますけど。やっぱり温かい相槌って大事だなと思います。これって親子だけじゃなくて、職場でも大事ですね。ゴジラくんの相槌が温かいですよね、いつも。もっと話したくなるような相槌だから、話していて楽しいです。

(ゴジラ)人間の成長は、積み木のようなのね。成長の過程っていうのは一つ一つの積み木で、子どもの時に積むべき積み木が積めてなかったら、その先は積めないんですよ。

例えばね、これは僕の尊敬する小児科の先生がおっしゃっていたんですが、思春期にキレちゃう、自分の感情が制御できなくて暴れちゃう子どもさんがいますね。その先生はキャリアの後半は児童相談所に勤めていましたが、そういうお子さんの対応として、二十歳位の子どもを親に抱っこさせるんですよ。そうするとその暴れちゃうのがだんだん収まってきます。つまりその彼、彼女らはそういった経験をされてないんですよ。

人間としては、親から愛情をもらったっていうことが自尊心や自信を育てるわけです。最近の子どもたちは、自分たちが自分たちでいいんだって言う、そういう自尊心が非常に低い子ども達が多いんですよ。僕は、親や周りの大人達が「あなた、それでいいんだよ」って言ってね、抱きしめて、本当にそういう時間を作ってあげるって言うことが何よりも大事だと思う。生まれた時からね、そういう経験を積み重ねていくっていうことが大事。でも、それができなかったからダメかっていうと人間っていうのは可塑性っていうのがあるからね、もしだめな場合でもまた後で補えるんですよ。だから、子どもの自尊心が低くて困ったことになっていたら、もう一度やり直していただきたいなっていうのがゴジラ的な発想・主張です。

—先程の事例であれば、二十歳でももう一度抱きしめて愛情が伝われば変わるということがあるわけなんですね。

(すずき)愛着の再形成をするということですね。人間の土台がうまくできなかったとしても、また二十歳過ぎてももう一回土台を作り直すことができますよということですね。

―二十年程前に「育て直し」というキーワードで話を伺ったことがあります。やっぱり愛情を注ぐ、愛情があるということが伝わるようにするということですね、親子関係で。

(ゴジラ)そうですね。もちろん、悪いことは悪いとはっきり言わないといけないけれども、「あなたは、あなたのままでいいんだよ」っていうことね。やっぱり自信を持たせるっていうかね。学校行くと「あなた、これできてない」とかって言われるわけですよ。僕は小学三年生の時にサッカー習ってたんですが、コーチにボールを止めるトラップをみんなの前でやりなさいって言われたの。それで失敗したら「こういうやり方はダメです」ってコーチに言われたの。それでもう一瞬で行きたくなくなって辞めちゃった。それと一緒だよ。だからやっぱりね、いいところを褒めてもらうといいよね。嫌なとこをいくら言われても、子どもも困っちゃうからね。やっぱり家に帰ったらね、「あんた、良いところがいっぱいあるよ」ってたくさん言ってほしい。

―しかも、友達の前でそういうことを言うのは、指導者としては良くないですよね。

(ゴジラ)その先生を責めようとは思いませんけどね。でも、やっぱり親ができる事は、そういった社会の中で、子どもたちに対してね、悪いことしたらはっきりあかんて言わないとダメですよ。ちゃんと正しくしなさいと。それは当然です。でも、ちょっとしょんぼりしてる時があればね、「あなたはここができるよ」って、良いところをしっかり褒めてやってほしいなと思いますね。

子どもの問題行動について

(すずき)子どもは親からの愛情を得るためにいろんなことをするんです。簡単に得られない場合は、問題を起こすことで注意を引こうとすることがよくあるんですよね。だから不安定な子の中には、親から求めているものを得られないがために、問題行動を起こすっていうこともあるんじゃないかなと思います。

(ゴジラ)みんなと同じ行動をするように強制されると子どもは、反対にもう嫌で嫌でたまらなっちゃうよね。僕もそうでしたけど。

―先生もですか？

(ゴジラ)ひどかったと思いますよ、僕は。学校の中で絵を描きなさいって言われたことがあるんです、画板を持って。僕の小学校は保健室の前に池を造ってましてね。そこに錦鯉がいたんですけどね。そこで絵を描くふりをして釣りしてましたからね。釣れるんですよ、またこれが。給食のパンで。だから、釣りに忙しくて絵が描けない。(笑)

―釣りやってるのも許容してくれてたんですね、その当時は。（笑）

（ゴジラ）僕らは隠れてやってるつもりでしたけど、職員室の前で大騒ぎしながらやってますからね。だから見て見ぬふりみたいなところもありましたよ。

（すずき）そういう、人がやらないことをやるからこそ、新しいものを生み出したり、何か作り出したりできるわけですね。

（ゴジラ）良いこと言ってくれるね。

（すずき）原動力になるじゃないですか。おもしろいことしたいとか、同じことはしたくないって気持ち。

（ゴジラ）僕も同じことするのがすごく嫌いだったのね。高校の時、倫理社会という授業があって、その先生、すごく用意をきっちりしてくださるのね。授業の時に必ずプリントを作ってくださってて、大事なとこを括弧書きにして、授業で先生が説明したらそこに書くわけですよ。試験の時はそこを覚えたらいいわけで、実際、その試験を受けたんだけど、僕その試験を白紙で出したの。なぜかと言うと、「こんな先生が言ったことをただ単に覚えて書くようなものは勉強じゃないと思います」って言って。高校の時にそんなとことしてましたからね。酷いでしょ。

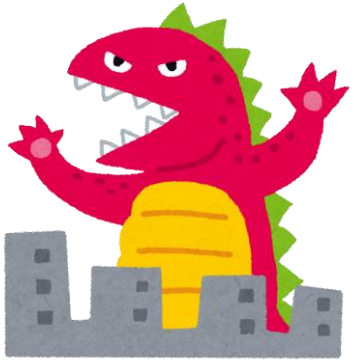
―でも、それをやってもお家に帰ったら「それでいいんだよ」っていう親御さんがいらっしゃったということですよね。

（ゴジラ）いや、親は知らなかった。（笑）でもね、その先生が僕を呼び出して「ゴジラくん、これではちょっと上の学年に上がるのが難しい。でも、君の顔を見てると一はなかなかつけられないんだよね」って言うんです。「じゃあ、なぜ僕がそうしたかを作文に書かせて下さい」って言って、答案用紙の裏側にいっぱい書いて出したの。そしたらその先生、成績表に三くれた。（笑）

―こんな感じで、やっぱりゴジラと名乗るだけあって、今までの常識とかちょっと殻を破ってくれる、そんな感じがしますが。（笑）

―おそらくラジオをお聴きの子育て中の親御さんが日下先生にお話を聞いてほしいと思われているでしょうね。今、悩んでいる方、ご相談したら突破口が見い出せるかもしれませんね。また、日下先生、来てお話ししていただいていいですか？

(ゴジラ)良いですよ。いつでもゴジラ役として。

—お忙しいとは思うのですがぜひ、よろしくお願いします。日下先生、鈴木先生、今日は本当にどうもありがとうございました。

(すずき)ありがとうございました。